

## チャールズ・A・ビアード小論

有 賀 貞

二〇世紀前半のアメリカの歴史学界に最も大きな影響を及ぼした歴史家として、誰しもフレデリック・ジャクソン・ターナーとチャールズ・A・ビアードとを挙げるであろう。ターナーが著述家としては比較的寡作であり、自らの活動の範囲を歴史学者としての研究と教育とに留めたのに対して、ビアードはきわめて多作な著述家であり、きわめて多面的な活動家であった。

ビアードは歴史・政治・時事問題などに関して、共著書を含めれば百冊近い著作を著し、おびただしい数の論文や評論を書き、歴史学者、政治学者、評論家、あるいは行政専門家として多面的な才能を發揮した。一九二〇年代および三〇年代には、彼の影響はきわめて大きく、アメリカの歴史学界のみならず、政治学界、さらには知識人一般に及んだ。第二次大戦以降、彼の影響力は減退した。彼の外交政策観は時代遅れのものとなされ、彼のアメリカ史に関する業績は批判の対象となった。しかしまた、近年、彼の

業績を再評価する傾向もあらわれている。批判されるにせよ、再評価されるにせよ、彼の業績がくり返し参照され、言及され続けていることは、ビアードが、アメリカの知識人の世界における一箇の巨人であることを示すものであるといえる。

わが国では、ビアードの名は、彼が東京市の市政顧問として再度来日したことも手伝って、戦前からかなり知られていた。彼の著作のいくつかは翻訳されており、また彼の業績のさまざまな面については、それぞれいくつかの論文で紹介されてきた。しかし、彼の生涯の各時期のさまざまな業績を総合して、彼の思想の発展と知的関心の変化とをたどり、彼の知的生涯全体の意味を解釈した論文はなかった。私はそのようなビアード論のための準備として、一九六二年夏、「チャールズ・A・ビアード覚え書」を書き、当時、東京大学教養学部教養学科に組織されていた兩大戦間研究会の『会報』第七号、一九六二年九月、(謄写刷り)に

投稿した。

当時は、ピアードの知的生涯に関する評伝や研究はまたなかった。Howard K. Beal, ed., *Charles A. Beard* (1954) は示唆に富む論文を集めていたが、それらはそれぞれピアードの活動の一つの面を扱ったものであった。その後まもなく Bernard C. Borning, *The Political and Social Thought of Charles A. Beard* (1962) が著わされたことと知り、やがて Richard Hofstadter, *The Progressive Historians: Turner, Beard, Parrington* (1965) に接した。私はこれらのすぐれたピアード研究が私のピアード解釈を多くの点で支持するものであったことを喜ぶとともに、またそれらの研究の出現によって、私が改めてピアードを論じることの意味がほとんど失われたことをいささか残念に思った。しかし私のピアード論もまた若干の独自性を主張することができるとは思えない。またそれはピアードに関心をもつ人々に対して簡単な序説としての意味をもちうるかもしれない。そのような希望を抱きながらここに旧稿を改訂し再構成する次第である。

### 一、農業的企業家—家族背景の影響

「おはいり」とピアードさんはいった。「今ちようどコネテのかたわら、製材や製粉、土建業や不動産業をも営む多角的な企業家であった。ピアードは父の農場で育ち、学校で学びながら農場の仕事を手伝った。大学に進学する前、父から委せられて、兄と二人で地元の新報の編集と経営に当たったこともあった。彼はこの父から企業家的精神と人道的正義感と権威に対する自主独立的な態度とをうけついで。後年、彼が農場を経営したのも、歴史における経済的要因を重視したのも、社会改革のためにさまざまな活動をおこなったのも、この父を中心とする家庭の雰囲気の影響によるところが大であった。

ピアードが育ったナイッタウンの社会は、彼の言葉によれば、個人主義的競争の精神よりも共同体的な協力の精神があふれていたという。それは各家庭がそれぞれ一応の資産をもって生産的活動を営みながら、共同体的な連帯感をもって協力する社会であった。少くともピアードは彼の故郷について、このようなイメージを作り上げていた。彼が都会の中の生活を好まず、結局、コネテイカットのニューミルフォードに牧場を買ってそこに落着いたのも、彼が育った農業的の社会に対する郷愁からであったかもしれない。

しかしピアードは復古主義者でも農本主義者でもなかったし、また農民をロマンティックに理想化することもなかった。その点で彼は、フロンティア農民を理想化する傾向

チャールズ・A・ピアード小論(有賀)

イカットの私の農場の者が買った乳牛の値段を調べていたところだよ。このごろ乳牛の値段がひどく高くなってね。」——エリック・F・ゴールドマンはジョンズ・ホプキンス大学の学生の頃、ピアードの研究室を初めて訪れた時の思い出について、こう書いている。若い学生は彼の知的偶像であるこの大学者が乳牛の値段に係り合っていることに驚いた。このエピソードはピアードという人物の特質をよく示すものである。

これは実際の才能にすぐれた人間であり、世俗的なことがらを軽蔑せず、一般民衆との距りをもたない知識人であったピアードの性格を示唆している。そしてまた、それは彼の歴史の経済的解釈の由来(「乳牛の値段」を「公債の値段」に置きかえれば「憲法の経済的解釈」になる)を示唆する。さらにそれは、彼が自ら述べたように、「ほとんど社会主義者」になりながら、社会主義者とはならなかった理由を示唆するといえるかもしれない。彼が生まれ育ったインディアナ州の農業企業家という家族背景は彼の知的生涯に大きな刻印を留めていたのである。

ピアードは一八七四年インディアナ州ナイッタウンに生まれた。ナイッタウンは彼の言葉によれば、大富豪も貧乏人もいない農民と田舎企業家からなる等質的な社会であった。彼の父はこの地方の最初の定住者の一人で、農業経営のあったターナーと異っている。ターナーはまだフロンティア社会の面影を残すウイスコンシンのポータイジで育ったのに対して、ピアードが育ったインディアナのナイッタウンは商業的農業の発達した農業社会であった。彼にとって農民とは資本主義経済の中の農業経営者としての農民であった。

けれどもナイッタウンのイメージは彼にとって、終生、一つの理想的な社会であり、彼が「集産主義的民主主義の社会」あるいは「働く者の共和国」を考える時、そのイメージが彼の思考に影響したのである。安定したゆたかな生活を営む農業的企業家の社会は彼の「働く者の共和国」の一部であった。彼は労働者についても、ナイッタウンの農民の生活に準ずるゆたかさや安定が与えられるべきであると考えたのである。

ナイッタウンの社会の農民は「働く者の共和国」を支持したが社会主義を望まなかったであろう。彼らが望んだのは、計画経済によって彼らの農業経営が安定することであろう。ピアードが「ほとんど社会主義者」になりながら社会主義者にならず、資本主義の枠の中で国民的な共同体的社会を作ること考えた理由がここに見出される。彼の思想の中に保守主義の糸が一筋貫いているとすれば、それは彼が理解し彼自身がもっていた農業的企業家の心情のた

めであった。

## 二、進歩についての信念と歴史の 経済的解釈の提唱

ピアードがはじめて社会問題に触れたのは彼がデポー大学に在学中シカゴを訪れた時であった。中西部第一の工業都市の実情をまのあたり見て、彼は人道主義的な社会改革の精神に目覚めた。大学卒業後、彼はオックスフォードに留学したが、ラスキンの影響をうけた彼は、勉学のかたわら、イギリスの社会運動家の中に加わって労働者の啓蒙に活躍した。彼の最初の著書『産業革命』(一九〇一年)は、彼が在英中、労働者の学習用テキストとして書いたもので学問と社会的実践とを結びつける彼の傾向がすでに現われていた。

帰国後ピアードはコロンビア大学で学位をとり、まもなく政治学の教授となった。コロンビアの同僚には「新しい歴史学」の提唱者ジェームズ・ハーヴェイ・ロビンソンがいた。ロビンソンは歴史を社会改革の道具にしようとした歴史学者である。彼は現在の問題への関心をもたずにとだ過去の事実をせんさくする歴史学者たちを非難し、もし歴史の研究が現在の社会改革のために役立たなければ、それは無意味なものであると主張した。歴史の発展過程で

進歩を推進しあるいは阻害した社会的な力の交錯を分析することに、社会改革のための指針を提供すること、これが彼の考えた歴史学者の使命であった。

すでに「産業革命」においてそのような傾向を示したピアードはロビンソンの考えに共鳴し、彼らは協力して近代ヨーロッパ史について数冊の著書を出した。これらの著作では経済的問題はかなり重点をおいて記述されていた。彼らは能率的な生産と公平な分配との問題を社会改革の重要な問題とみなしたからである。

経済問題の重視はピアードが単独で書いた著作では一層目立っていた。『政治』(一九〇八年)、『合衆国憲法の経済的解釈』(一九一三年)、『ジェファソンニアン・デモクラシーの経済的起源』(一九一四年)など一連の著作で、彼は経済的利害の分析によって政治的対立を解釈した。とくに『合衆国憲法の経済的解釈』はその偶像破壊的性情のゆえに彼の名を著名ならしめたのである。

「私の父が友人と政治を論じている時、経済問題がいつも話題にのぼっていた」とピアードが語っているように、彼は少年時代から政治と経済との関連を知っていた。企業家的精神に満ちていた彼の家庭では、経済的な事柄はつねに非常に重要な問題であった。マルクスやセリグマンの著作についての彼の知識も、マディソンの「フェデラリスト第

一〇番」の再発見も、イギリスでの社会改良主義者との接触も、また当時のアメリカ社会の様相も、すべて彼に経済的な事柄の重要性を確信させ、歴史の経済的解釈の妥当性を確信させた。彼は一九二九年のあるとき、「私がいつも言ってきたことは、人間を行動に駆り立てるさまざまな動機の中で、食物、衣服、住居のための闘争が過去の歴史を通じて最も重要だったということだ。それは真実ではないか」と語ったという。

この言葉が示唆するように、歴史の経済的解釈は彼にとってあたりまえのことと考えられたのである。しかし彼は『合衆国憲法の経済的解釈』では、憲法制定者たちの政治行動における経済的利害についての考慮をあたりまえのこととして述べたのではなかった。彼は彼らの政治行動が彼らの経済的社会的地位によって条件づけられたというに留まらず、彼らが合衆国憲法を制定するに当って私利私欲によって動かされたことを繰り返し強調した。彼は合衆国憲法は自己の利益を政治的手段によって擁護ないしは発展させようとした「少数者」集団による一種の「クーデター」による産物であり、「経済的文書」であると述べ、合衆国憲法とその制定者たちとに対して偶像破壊的議論を展開した。彼がこのような偶像破壊的態度をとったのはなぜであるか。彼が父から受け継いだ権威に対する反抗心のあら

われであるかもしれない。世間に反響をひき起そうとする新進著述家の功名心のあらわれであるかもしれない。またホーフスタッターが指摘するように、革新主義時代のマックレーカー的な暴露主義の影響であるかもしれない。またナシヨナリズムの神話を必要とせず、そのようなものにもむしろ軽蔑的な態度をとる知識人の自己主張のあらわれとみることにも可能であろう。また彼は大企業勢力の抑制を目ざす革新主義運動の支持者として、大企業勢力の前身を建国期の「資本家的利益」の代表者の中に見出したのことも考えられる。彼はまたこのような憲法論を展開することによって憲法修正を主張する革新主義者の運動に一つの論拠を与えようとしたのだとも考えられる。

一九二〇年代の末までピアードが歴史の経済的解釈の普遍的な妥当性を信じていたことは確かである。彼は人間の社会思想は経済的現実の反映であると考え、政治の場を媒介とした両者の相互作用の中に歴史の発展の鍵を見ようとした。『アメリカ文明の興起』(一九二七年)はそのような視点から書かれたアメリカ史論である。ピアードにはまた、また経済の発展の中で形成される経済的利害関係のもたらす政治的対立の展開として二十世紀初頭までのアメリカ政治史を簡潔に叙述した『アメリカ政党史』(一九二八年)がある。

ビールドは二〇世紀初頭までのアメリカ政治史を資本家的利益を代表する「ハミルトン主義者」(フェデラリスト)・ホイッグ(共和党系列)と、主として農民的利益を代表し次第に労働者をも代表するようになった「ジェファソン主義者」(リパブリカン)・ジャタソニアン(民主党系列)との抗争とみなした。ビールドの家系はホイッグ(共和党)の系統であったが、彼は民主主義を推進してきたジェファソン主義者の側に好意をもっていた。ただし彼はジェファソンの農本主義的思想には共感をもたなかったし、「弱い政府」「経済力の分散」といったジェファソン以来のアメリカ民主主義の諸観念についても時代遅れだとみなしていた。彼は革新主義者ではあったが、ウイルソンが唱えたニュー・フリーダム(の構想)をも含めて、革新主義運動が時代遅れの観念に捉われているのではないかと感じていた。それはビールドに限られた疑念ではなく、彼がしばしば寄稿した『ニュー・リパブリック』の編集者ハーバート・クロウリーにも、同誌に拠っていたウォルター・リップマン、ウォルター・ワイルにも共通するものであった。クロウリーは一九〇九年に著した『アメリカの生活の約束』の中で、ジェファソンの目的をハミルトンの方法によって実現すべきことを主張していた。ビールドも『ニュー・リパブリック』系統の知識人たちも連邦政府が適切な計画と規制によつ

て国民の福祉を積極的に増進しなければならないと考えていた。おそらく彼にとつてこの時期のものでは、一九一二年の革新党のプログラムが最も適切なものと思われたであろう。

革新主義者であるビールドにとつて一九二〇年代の保守政権の時代は歓迎すべきものではなかった。しかし彼はこの時代には、アメリカの将来についても世界の将来についても楽観的な観念をいだいていた。

第一次大戦の勃発以来、ビールドは外交問題に次第に大きな関心をもつようになつた。アメリカ経済が海外との結びつきを必要としている以上、政治的な孤立主義は時代遅れであると彼は思った。彼はウイルソンの政策を支持し、アメリカの参戦に賛成した。彼はウイルソンの指導力がアメリカの国力とヨーロッパの進歩的勢力とに支持されて、リベラルな講和を実現することを期待した。彼はウイルソンの「十四カ条」に基く新しい平和な世界秩序が樹立されることを期待した。

一九一八年の夏、ビールドは妻メアリとともに他のリベラルな知識人と協力して国際協調主義の観念について啓蒙運動をおこなう団体を作つた。ヴェルサイユ条約は彼を落胆させたが、他の何人かのリベラルとは異なり、彼は国際連盟の反対者とはならなかった。講和条約が欠陥の多いも

のであつてもアメリカは国際連盟に加わるべきであるという立場を彼はとつた。

一九二一年から二二年にかけておこなわれたワシントン会議の諸条約や一九二五年のロカルノ会議の産物である諸条約は、不安定な大戦間の世界にインディアン・サマーをもたらした。国際連盟はアメリカの加入を欠きながらも一応円滑に機能するようにみえた。こうした状況に元気づけられて、ビールドは連盟の意義を肯定し、国際協力の必要を主張した。この間、たびたびヨーロッパや日本を訪れた彼は、二〇年代の末まで国際協調主義者であった。二〇年代の後半はアメリカ経済はかつてない繁栄を示し、世界的にも好況で、世界の平和は長続きするようにみえた。ビールドは当時、アメリカを中心とする国際資本主義の発展が国際経済を組織化し、世界の平和を保障していると論じ、カウツキーの「超帝国主義」論に似た見方をとっていた。彼は平和の継続と人類全体の進歩とを楽観していた。彼はそこに現代の意義を認めていた。『人類の将来』(一九二八年)という彼が編集した論文集の中で、彼はベシミストを批判し、人類の進歩についての信念を表明していた。

### 三、一国民民主主義への転換と相對主義歴史学への傾斜

#### 主義歴史学への傾斜

チャールズ・A・ビールド小論(有賀)

一九三〇年代の初め、アメリカに深刻な経済不況が訪れ海外ではファシズムや軍国主義が台頭するとともに、彼の思想は大きく変動した。そしてそこから大陸主義という政策構想といわゆる相對主義歴史学とが生まれるのである。

アメリカの大不況はビールドに強い衝撃を与えた。彼はそれまで以上に積極的に時事問題について発言するようになり、それまで以上に、学問的活動を実践的に結びつけるようになった。一九三一年に彼は「アメリカのための五カ年計画」を書き、彼は大胆な計画経済を主張し、アメリカ経済建直しのための方策を提示した。彼は各産業別のシンジケートを作り、それらを全国経済協議会によつて統轄し、また政策決定の機関として政策計画委員会を設けることを提唱した。一九三三年に始められたニューディールがこのような方向に進むことを彼は期待したのである。

その間に、世界情勢も動揺し始めていた。一九三一年に日本は満州を侵略し、ヨーロッパでは三三年にヴァイマル共和政が崩壊し、三五年にはイタリアのファシズムがエチオピアを侵略した。このような平和の破壊と民主主義の衰退とは、それまで世界の平和と民主主義の前進を信じていたビールドを幻滅させた。そしてそれらの現象は、アメリカ経済の崩壊とともに、ビールドに彼の従来の思想に

対する反省を迫ったのである。

ビールドは一九三四年、『国民的利益の観念』の中でアメリカにおけるこれまでの国民的利益の観念を批判的に回顧し、『国内における門戸開放』の中で新しい国民的利益実現の構想を提示した。

これまでアメリカは海外市場の拡大によって経済的繁栄を維持しようとしてきた。しかし海外市場に依存する繁栄は不安定なものであり、しかも外国との紛争を招きアメリカを戦争にまきこむことになる。幸にしてアメリカは広い国土と豊かな資源とに恵まれている。計画経済によって国内資源の開発と産業の高度の発展をはかりながら、社会改革によって国民の生活水準を引上げ、国内市場を拡大してゆけば、アメリカは真に繁栄する経済を作り上げることができると、ビールドは考えた。これが真の国民的利益の具現化であると彼は論じた。海外に対して門戸開放を要求することではなく、『国内での門戸開放』を目ざすことを彼は提唱した。海外に目を向けることなく、「われわれ自身の庭を耕すこと」に専念すれば、アメリカは外国との紛争にまきこまれることなく、他の大陸の動乱をよそにアメリカ民を主主義を発展させていくことができると、彼は考えたのである。侵略国家が擡頭してもアメリカはアメリカ大陸だけの防衛を考えればよい。それはアメリカの地理的位置のお

かげで、比較的小規模な軍備だけで達成することができ、アメリカの軍事国家化をもたらさない。これが彼の大陸主義の観念であった。

日華事変の拡大も欧州における第二次大戦の勃発も彼の大陸主義を弱めず、むしろますます大陸主義の妥当性を確信させた。かつてジェファソンは旧世界を圧政と戦乱の世界とみなしたが、一九三〇年代のビールドも似たような考えをもったのである。アメリカには民主主義にとつて安全な世界をつくる力はないのであり、アメリカの外に擁護すべき民主主義は存在しないのであった。英仏と独伊との対立も旧帝国主義国と新帝国主義国との対立にすぎないと彼は考えるようになっていた。アメリカがなすべきことは、戦乱の世界から孤立して産業社会における民主主義の達成を国内で達成することであった。スターリンが一国社会主義を唱えたようにビールドはいわば一国民主義を唱えたのである。彼はもはや以前のように現代の世界平和や人類の進歩を信じることはできなくなった。ただアメリカのみが彼の希望となったのである。

ファッシズムと軍国主義とが擡頭する世界の中で、アメリカの民主主義のみがビールドの希望となり、彼がその希望の実現のために歴史を叙述しようとした時、彼は従来の彼の経済的解釈の限界を意識し始めた。彼は従来、歴史の

経済的解釈は普遍的適用に耐える最も妥当なものであると思っていた。しかし「ファッシズムの勃興や発展、その本質の経済的解釈は過度の単純化である」と彼は感じた。今や彼は経済的解釈はある時期のある国についてのみ——彼が最もよく知っている一九世紀のアメリカやイギリスの場合にのみ——適用できると考えるようになった。彼は従来の経済的解釈が当時の状況の下では適切であったと考えた。しかし、彼は従来の歴史解釈の力点が次第に新たな時代の状況に合わなくなっていると感じるようになった。その意識が彼をしてことさらに歴史叙述の相対性を強調させることになったのである。

歴史叙述は歴史家による歴史の解釈を含むものであり、したがって思想の表現である。歴史をどう解釈し叙述するのが適切であるかは、歴史家の扱う時代と場所、また歴史家が活動する時代と場所とによって異なる。その判断は個々の歴史家が「信念の行為」によって決めた「思考のわく」に基いて下すべきものである。ビールドはこのように論じた。人類の進歩について確信を失い、アメリカ民主主義の将来についても不安を感じるようになった時、彼は「信念の行為」としてアメリカ民主主義の発展の可能性に賭けようとしたのである。

ビールドはローズヴェルトのニューディールが、彼の「国内における門戸開放」の構想を実現していくことを期待した。しかし一九三五年になると、はやくも彼はローズヴェルトの政策を猜疑の念をもって眺めるようになった。彼はローズヴェルトの日和見的な無定見を恐れた。「深刻化する国内の危機の打開の難しさに直面し、それに比べて対外戦争がより容易なことに気付くとき、ローズヴェルト大統領はどうするであろうか。過去のアメリカの政治家のやり方からすれば彼は後者を選ぶであろう」とビールドは述べた。

ローズヴェルトは一九三七年の景気後退に直面していた時、有名な「隔離演説」をおこない、侵略勢力を抑えるために、他の国々と協力する必要を説き、対外政策の転換を示唆した。このような発言はビールドには大統領がニューディール路線を逸脱して戦争への道に歩み出す兆候であると思われた。

彼は一九三九年八月、ローズヴェルト大統領は国内の経済問題の解決を試みず、国民を戦争に引きこもうとしていと非難した。その後まもなく第二次大戦が勃発した。翌年、ドイツは電撃戦を展開しヨーロッパ大陸の大半を支配

下に収めた。このような情勢の展開もビアードの対外政策観に何の変化もたらさなかった。彼は軍備拡張に反対し武器貸与法に反対し、「船団護送の艦艇はドイツ潜水艦を目標撃次第攻撃すべし」と命じた大統領命令を非難するなどアメリカを戦争に引きこむと彼が考えた諸政策に懸命に反対し続けた。

ビアードにとつて、アメリカ民主主義の将来は世界の動乱からの中立にかかっていた。彼は大多数の国民もまた同じく大戦への不介入を望んでいて感じた。そして彼は大統領がその手中に過大な権力を集中し、アメリカの参戦が不可避になるような情勢を作り出していると感じたのである。彼はローズヴェルトのリーダーシップの中に独裁の傾向を感じた。国民的な計画経済をおこなうためには、連邦政府の権限を強化しなければならぬ。しかし一方では大統領に過度の権限を与える危険について彼は切実な不安を感じていた。一九三九年に書かれた『新政策と旧政策』にはこのディレンマがよく表れている。彼は連邦議会による大統領の権限の抑制が必要であることを述べている。しかし議会はいつもさまざまな圧力団体の争いの場ではなかった。連邦議会は適切な国民的計画経済を推進させるための知性をもちえるであろうか。ここに彼のディレンマがあった。

アメリカが参戦した後、アメリカ民主主義の将来についてのビアードの不安は一層増大した。彼はアメリカの自由の伝統を独裁の危機から、軍事国家の危険から守らなければならないと痛感した。彼は『アメリカ精神の歴史』(一九四二年)、『共和国』(一九四三年)、『アメリカ合衆国史』(一九四四年)という三冊の著書を著わし、アメリカの自由主義の伝統を強調した。従来の経済的解釈はかげをひそめ、建国の父たちは自由を擁護しつつ建国期の難局を克服した功労者として描かれた。

第二次大戦は連合国の勝利に終わった。しかしアメリカは原子爆弾と巨大な軍事力をもってソ連との新たな対立にはいるうとしていた。ビアードはすでに齢七十を越え、精神的にも肉体的にも疲れていた。もはや彼には新しいアメリカと世界との状況の上に立つて、国民に新しい指針を与える力もたなかった。年老いたビアードはただ失われた彼のアメリカを愛惜し、それを破壊したローズヴェルトに強い怒りを感じていた。戦後の彼に残された知的精力は許しがたいローズヴェルトへの攻撃に向けられた。『アメリカの対外政策の形成』(一九四六年)、『ローズヴェルト大統領と戦争の到来』(一九四八年)の二著で、彼はローズヴェルトが国民を欺いてアメリカを戦争に引き入れたことを論証しようとした。ビアードはかつて『戦争についての悪魔

説』(一九三六年)において、第一次大戦への参戦の原因を一部の戦争利得者の陰謀に帰する見方を排撃し、政府指導者の平和的意図にもかかわらず、アメリカはその経済構造の性格のゆえに参戦せざるをえなくなったのだと論じた。しかし第二次大戦参戦については、彼はその責任を欺瞞的なローズヴェルトの政策に帰し、自ら悪魔説をとったのである。

アメリカの民主主義はどうなるのか。彼がアメリカ民主主義の発展の条件と考えたものは破壊され、彼が恐れた大統領への過大な権力の集中、国家体制の軍事化が進み、そうした体制の下でアメリカは世界帝国への道を歩んでいるようにみえた。彼はアメリカについて悲観に陥りながら一九四八年に死んだ。

ビアードの知的生涯は、楽天的で精気に溢れていたリベラリズムが二〇世紀の現実の展開の中で次第に不安と幻滅とを味わい、ついに崩壊していく過程であった。晩年のビアードはアメリカの知識人の中では孤立した存在となっていた。彼はリベラルな知識人が聖戦として支持した戦争の意義を認めず、彼らの英雄ローズヴェルトを激しく批判することによって、彼らから孤立した。彼らはビアードの対外政策論をアナクロニズムとみなし、そして彼らの大多数は戦後の冷戦をもやむをえざるものとして受容した。彼ら

チャールズ・A・ビアード小論(有賀)

はアメリカ民主主義への脅威をもつばら外からのものとみなし、ビアードのように内からの脅威を深刻に考えることはなかった。

しかし一九六〇年後半になって、アメリカのリベラルな知識人が抱いた危機感を考えるならば、ビアードは彼らがやがて抱く危機感を時代に先んじて敏感に感じとり独り警鐘を鳴らしたのだと評価することができるであろう。彼らが近年になって深刻な反省を迫られた諸問題は、大統領への権力の集中にせよ、アメリカ経済の軍事化にせよ、世界帝国としてのアメリカの行動にせよ、多くはかつてビアードが指摘し警告した問題なのである。

一九六〇年代後半になって、アメリカの知識人がビアードを再評価する雰囲気形成された。彼はとくにニュー・レフトの知識人たちによって好意的に評価された。アメリカの現状をラディカルに変革しないかぎりアメリカ民主主義は再生しえないとみる彼らは、アメリカの軍事化、帝国化を恐れ、大陸主義にアメリカ民主主義の存続の道を求めたビアードに共感を覚える。彼らは当然冷戦の意義を否定するが、さらにビアードと同じく第二次大戦参戦の意義についてもまた否定的態度をとるのである。

ビアードがアメリカ民主主義の現代的危機をいち早く感じとり警告したことは高く評価されるべきである。しかし

彼がアメリカの対外政策をもっぱら海外への経済拡張主義や国内政策のゆきつまりの打開という角度から解釈し、アメリカの対外政策が第二次大戦勃発以来の国際政治の文脈の中で果した建設的役割を考慮に入れなかった視野の狭さはそのま味受け継がれるべきではないであろう。

〔参考文献〕 制限枚数を越えるため脚注は省略した。

「モアードの著作としては、本文中に言及したものの外、『*The Economic Basis of Politics* (3rd rev. ed, 1945); *The Discussion of Human Affairs* (1936); "Prospects for Peace," *Harper's Magazine* (March 1929); "Giddy Minds and Foreign Quarrels," *Ibid.* (August 1936); "Written History as an Act of Faith," *American Historical Review* (January, 1934); "Currents of Thought in Historiography," *Ibid.* (April 1937) などを参照した。

「モアードに関する著作・論文では、はしがきで言及したものの外、Lee Benson, *Turner and Beard* (1960); E. F. Goldman, "Origins of Beard's Economic Interpretation of the Constitution," *Journal of History of Ideas* (April 1952); Hubert Herring, "Charles A. Beard: Free Lance among the Historians," *Harper's Magazine* (May 1939); Matthew Josephson, "Charles A. Beard: A Memoir," *Virginia Quarterly Review* (October 1949); William A. Will-

iams, "Charles A. Beard: The Intellectual as Tory-Radical," in Harvey Goldberg, ed, *American Radicals* (1957); Selig Adler, *The Isolationist Impulse* (1957); 中屋健一「モアードのデヴィル・セオリーについて」(東京大学教養学部紀要『アメリカ研究II』)、奈倉道子「モアードの外交政策観」(東京大学大学院国際関係論課程修士論文、一九六〇年)、深谷晃子「アメリカ外交における孤立主義」(東京女子大学『史論』一六)などを参照した。